

## エバのために<sup>(i)</sup>

多くのエバ——ペロンのエバ、アヴェエ・エバ・ダリ、エバ・ブラウン（マリア）そのほか——の時を超えた死の日に、生き長らえているエバの名をあげるのには正しい行いだろう。かなうことならエバの不死の墓碑銘をあたらしい墓石に刻むつもりだ。その墓石はわが唯一の友、アルシデス・リマ・ブッシュのものだが。死はアルシデスのもうひとつの未発表作品になるはずだった——死に「急襲」されていなかったらの話だ。エバはアルシデスの逝去を知っているだろうか。この凶報が耳のきぬた骨をいくども叩くことに成功したのでないかぎり無理だろう。年老いたエバはもう記憶も干からび、世間で起きたことをひとつとして記憶にとどめることもできないに違いない。

エバは失明に近い状態で、耳もほぼ聞こえないという。高齢でかすんだ頭でひとりごとを口にしなから、沈黙のなかで生きること慣れはじめているのではないか。ならば邪魔はするまい。モード雑誌からヒントを得て、わたしが代わりに話すことにしようか。わたしたちは、想像するよるこびは最後まで残ると考えていた。心をかき乱す可能性、エバのことをたぐいまれな女性と思うひともいたが、じっさいはずっ

と——すくなくともわたしの見立てでは——頭はからっぽだった。

アルシデスのミューズだった女性<sup>エバ</sup>がマスコミになにかを言うことで、思い出を汚さないように。そしてアルシデスがここ、この数行に、第二の死——忘却——からの避難所をみつけることができるように。

アルシデス・リマ。この奇妙な名前を心に留めておくことをお勧めする。なにかの意味があるはずだ。この名とともに、チリにおけるボディ・アートの先駆者が失われた。ごく限られた作品数しかなく、しかも自身の肉体と一体化していたため、アルシデスの芸術が死後も残るとは考えられない。いつぼう、かれが言い散らしたことばと写真はおびただしい。まっとうな研究機関がじゅうぶん時間をかけ、新たな目で見かすべき評価を下すべきだ。できれば外国の機関が好ましい。

わたしは総合墓地をあとにしたところだ。張りつめた時間を過ごしたのち、アルシデスの遺灰を——故人が書き遺したように——受け取ってきたのだ。これだ。だが、このアルカリと土の塩をどうすべきかを考えるのも恐ろしい。エバの頭から振りかけなくてはならないのだ。アルシデスとわたしの共通の友人でもあるエバが抵抗したら、たっ

## エンリケ・リン 三角明子 訳

ぷりと灰を注ぎかけてやる。どちらがいいだろうか。戦うか、エバの共犯に安堵をえるのか。協力がえられた場合、アルシデスの遺体を焼いた灰色の残滓にペースクリームをませ、裸になったエバの体に塗らなくてはならなくなる。アダムの膏藥。これを塗ることでエバを復元するのだ、エバの体の一部になりたいとのぞんだあの肉が、原始の泥の女神・髭面のアフロディーテへのありふれた供物へと変わる。

わたし自身は不可能な企ての実行担当者に過ぎない。重い責務のせいで自分ではなにも考えられない。夜のとぼりが落ちるさい、黄昏と夜の境界線をかほそい煙でなぞることがわたしの役割だ。説得するにせよ力に訴えるにせよ、死にゆく女の前に死者の使いとして立つ役目を担い、肌を灰を、灰に肌を塗りつけるのだ。覚書にするされた仕事だけに限るかはわからない。それ以上は求めないでほしい。わたし自身もまた、確実に老境へと向かっているのだから。

覚えている。エバ・モンテス・デ・ラミレスとアルシデス・リマは、わたしたち家族の家で半世紀ほど前に出会った。わたしの妹コンスエロが社交界にデビューした日だ。このときこそ、愛情関係を停滞させる要素にさらされるおそれがない婚姻関係のはじまりとなった。この関係は婚約の神秘を経ることも、結婚小説や批評的リアリズムに終わることもないだろう。

その日までアルシデスはコンスエロに言い寄っていたのだが、熱意があるかは疑わしかった。パーティーで初めてエバを見たとき、自分に自分の役目を忘れ果て、無礼といってもいい振る舞いをした。なにをするにも英国風で紳士然としていたあのアルシデスがだ。あたらしい女友だちとともに、テラスのもっとも人けのすくない片隅、明かりが一番注ぐ場所で夜を過ごしたアルシデスは恍惚状態にあるようだった。アル

シデスは白いタキシード、エバは光沢のある絹と畝織りの綿に身を包んで冷やかに立っていた。雪のスパイラル。キャラメルアイスクリーム。当時アルシデスは「いかれたリマ」と呼ばれていた。ドイツ学校でもドイツ・スタジウムでも大学でも、一貫してその調子だった。

同世代の多くの若者たち同様、鉄拳宰相ビスマルクの失墜を苦く受け止めていた。法学を学び、サンティアゴで最初に武道の奥義を伝授された者のひとりだった。高校では臆病者と誤解されていたが、のちに恐れられるようになった。けんかをふっかけてきた哀れな門外漢に、一度ならず戦士として立ち向かってしまったのだ。おろか者に攻撃されておれを失ったアルシデスは、秘儀を授けてくれた恩師のおしえを忘れ、日本人が伝えてきたおそるべき入門の秘儀の掟を破ってしまったのだ。

それから月日をへて、アメリカ国籍のチョコレート工場でチリ国内代表を務める父親の財産を蕩尽するわけではないことが明らかになった。だからといって、アルシデスの研究が父親の財産を殖やす助けになるわけでもなかった。芸術への愛からパリへと出奔し、七年に渡りエビータ（エバ）・マリアとわたしとだけ文を交わした。だが帰国しても彼女に求婚はしなかった。父の跡を継ぐわけでもなかった。父親は百歳近くだが、耐えしのびながら生きている。かつての気難しい若者アルシデスは、帰国すると、どんな話題でもなめらかに堂々と三か国語で語る男となってわたしたちの前に姿をあらわした。

建築家としては、都市を建設する者たちの勝利に失望して帰国した。ヴァザリリの流派を通ったおかげで、空間の二次元効果を好んでいた。アルシデスは、画布の上でなく実物によって効果を作り出すほうを好んだ。鑑賞者のかけが一つになって幕を出入りする亡霊たちの不協

和あるいは退屈。それは空間そのものの呼吸であり、航跡を残し引きつける。

そして歳月が過ぎた。

待つのに疲れたと噂されたエバがバコ・ラミレスの求婚を受け入れた日の夜、三十三歳になっていたアルシデスはわたしに「体と魂を以て」エバのことを考える決心を伝えてきた。それが最初のことばだった。それからアルシデスは、著作権のことなど気にしないようすでステファヌ・マラルメの権威に頼るようになった。ある手紙で引用していたのは――

「久しい以前から死んでいた古来の観念が、そのまま、己れの夢が断末魔の苦悶を見せてきた幻想獣の明るみに映っているのを見、かつまた、記憶を絶した空虚な仕草において、みずからを認識するのだ、その仕草によって観念は、みずからを誘って、この極北の夢の二項対立を終わらせるために、幻想獣の明るみも、閉ざしたテクストも共に持つて、影の流産した混沌へと、深夜を絶対として切り離す言葉の混沌へと、<sup>(註)</sup> 回歸しようとする」

自分を大きく見せようとしていたのだと思う。アルシデスのプロジェクトは、マラルメとは違う意味で複雑だった。わたしはひとつ仮説を思いついた。アルシデスはエバになろうとしたのだが、同時におのれにそれを禁じようとした。そしてそれを「彼女を考える」と呼んだのだ。人々がかれに期待していたのはエバとの結婚であつて、エバを考えることではなかった。ただ、ずいぶん年月が過ぎてから、この結婚は独自のやりかたで貫き通されたのではないかと考えるひともし幾人かあらわれた。この抽象的な結婚の結びつきについてわたしが知っていたのは、可能性に対する意志の勝利を目指していたこと、それが知られざ

る傑作へと変貌していったとアルシデスから聞いたことだけだ。

はじめてわたしに接触してきた夜、この作品はごく初期の段階にあつた。わたしは、違う形ではめかしてくれることもできたのではないかと思つた。だがそれと同時に、当時のわたしが下品な異装者と受け止めたのは先駆者たるアルシデスにとつては不幸なことだったが、パフォーマンズの無垢さ――テオレマのためなら捨て去つただろう無垢さ――こそ、こんにちにに残るアルシデスの最大の功績ではないかとも思う。

あの五十八年の夜、母方の地所にある廢屋の薄暗い部屋で、わたしの妹のため開かれた舞踏会でエバ・モンテスが着ていたドレスに身を包み、アルシデスは四半世紀もあとに活発になる芸術活動の多くを先取りすることになった。ものしらずな模倣者どもが知っておくべきことだ。そのときの当惑をわたしは今もはっきりと口にできる。相変わらず、自分が芸術家だとは思っていないからだ。わたしはチリ絵画の修復家で、贋作者と呼ばれることもある。

「エバ・マリア」そのエウリュディケに歩みよりながらわたしは言つた。わたしの目のなかの過去をまばたきもせずじつと、見つめた末に、そのひとはひとつの像になつていた。その目は、直前に流した涙に濡れて四つに輝いていた。白熱した光を帯びていた。

「エバ・モンテス・デ・ラミレスではありません」と返してきた。「わたしは支持体、彼女はイデア」

声の調子でも音色でもなかった。思考のスタイルと構文こそが、エバを思考する友人をエバのなかに見るように仕向けていたのだ。シミュラクルの効力はそこまでの域に達していたのだ。

その夜、ああ、まだ若かつたわたしたちは協定を結んだ。わたしは

偽善者だったのかもしれない。わたし以外にはここまでのことは見せないと誓わせた。暗がりのなかで完成を迎えるまで作品を秘密にしておくことで、目にした者が誤解し騒いで作品に余計なものを混ぜこむことにならないように。その代わりわたしは、ただひとりの目撃者として作品の進展を見届けることを了承した。

おたがいに理解しあっていたかに思えたときにも、じつはわたしは、アルシデスを醜聞から守ろうと努めていたのではないか。正気を失ったと思っていたのだ。後年になって、アルシデス自身も同じように醜聞を恐れ、疑いを持たずに受け入れるわたしの性質を利用して意のままに操ろうとしたのだと考える理由ができた。今ではわたしは、芸術においてはすべてのためにすべてを懸けるのが唯一理に適ったことであり、狂気こそが、たとえごく手近な結果であろうと達成する基本となる条件であることも受け入れている。

さて、遺灰を収めた壺に話を戻すと、わたしはたったいま第三者の声を使った電話でエバ・マリアを引っぱり出し、一度は反故にされた約束の日にわたしを彼女の別荘に迎え入れる合意をとりつけたところだ。エバは疑問で頭をいっばいにしていたようだった、喘鳴をあげながら……そうではないか？

アルシデスはその身を以てエバの肖像を作り上げたのであって、無力な物質を用いたのではない。断続的に実践した試みだった。度重なる外国旅行はこのテーマとはなんの関連もなかった。帰国すると、決まってわたしを急かすのだった。「さて、続きからはじめようか」と。

アルシデスがこの地の社交界から距離を置いていたのは自身がそう望んだからか、プロジェクトによる要請か、それとも単にわたしたちみなを軽蔑していたことから生まれた偶然の結果なのかはわからない。

アルシデスはモデルであるエバと文通はしていたのだが、わたしにあの芸術作品の試作を見せた日以来、彼女に会うのをやめた。おりおりエバが使い捨てたものは欲しい、あとは彼女についてささいなことでも話してくれればいい——とかれは言った——創造の苦しみの刺激になるから。エバについて芳しくない情報を受け取ると、真のエバは自分のために・自分のおかげで実在するのであって世界のためではない、という思い込みは確信になった。現実を芸術作品に置き換える。肉と骨を備えた一種のイマーゴという形で。自分はその亡霊と再生の担い手となるだろう。前に見たエバそのひとに、かれ自身のまなざしがあらたな価値を与え補完するのだ。

その後アルシデスがあきらかにしたことによると、この作品は謙虚にも（この点でアルシデスは幻視者ではなかった）肖像画のジャンルに属するそうだ。話題になっていいる夜から、アルシデスがこの作品を思い描くのかかった数分に向けて発信されていた。完成させるのにかかるはずの時間よりずっと短い。死後遺した灰でタッチをいくつか加えて完成させるのだ。

作品の性格上、作者はエバの現況を省くことができたのではないか。あちこちを旅してまわる存在だ。アルシデスは五感を以て実際に経験するより、知識を得るほうを好んだ。文通相手と顔を合わせることを避け、書き文字によるへだたりを解消しようと彼女が試みるたびに裏切った。

エバはわたしの嘘にも愛想を尽かした。わたしがすべてを懸けて真実を打ち明け、差し迫った破局を回避しようとしたときにも、信じようとはしなかった。この十五年のアルシデスとわたしの会合についてよく知っており、日付も場所も正確につかんでいた。しかしわたしが

あの作品について話すと、家に入れてくれなくなった。わたしは、この十八年間にアルシデスが書いてよこした手紙を何通か見せることを提案し、その代わりになんとか一度だけ出入り禁止を解かせることに成功した。アルシデスがパリから送ってきた手紙はエバ自身の筆跡で、エバ・モンテスという署名さえあった。そして、この国を不在にしている間にコート・ダジュールで撮った写真も何枚か添えてあった。

エバは自分の字だと認めたが、わたしの妹コンスエロにあてた手紙を抜き取られたのだと主張した。十年前、見聞を広めるための旅行でヨーロッパを周遊中、わたしの妹にあてて書いた手紙だというのが、写真はというと、この点ではエバの主張は理にかなっていったが、写っているのがスカートを履いた染みではなく人間だということを受けられることは黄金の意志でもなければできないとのことだった。このようにして、わたしの意に反して、エバとわたしはもう会わなくなった。六十三年だったと思う。

いっぽう、アルシデスはわたしに嘘をつかれても気にしなかった。真実はゆるぎなくかれのものだった。その点は一貫していた。公開する勇気が出ない成果物を見せるためだけにわたしを必要としていたのだ。人づてに聞いた話や噂話、純粹な詮索でえられた程度のニュースを伝えられても平気だった。話のタネならば手に余るほどあった。エバはわたしたちの階級のしきたりを破っていた。三人の愛人を持つことひとつ取っても、結婚というものを貶める醜聞だった。

エバ自身は三人の男たち——さらに、親密な男ともだちとの間にすら——との間に子をもうけたことを誇らしげに語っていた。

アルシデスはエバのスキヤンダルとびつたり合うようにパフォーマンスを工夫したので、そのうちわたしは、両者には相互含意の関係があ

ると信じるようになった。

最初の結婚が破局を迎えるころ、一九五七年に、アルシデスは、目の前に見えるものをテレパシーで伝えてくれと頼んできた。わたしは、おまえが見える、と言った。

「だれが見えるって？」アルシデスが返す。

わたしはアルシデスの願望を叶えてうっかり言ってしまった、まなざしがわたしを混乱させたからだ。「エバ・マリア」と答えた。

二度目の結婚が破れた頃、わたしに訊いた。

「おまえの家にいるわたしはだれだ？」

「エバ・マリア」ふたたびわたしは言った。

「よく見ろ」言い張った。「おまえの友アルシデスだってよく知っているだろう」そのころにはもう、物質的な真似はすべて放棄したあとだった。

「よくわかってる」わたしは返した。「でもエバが見えるんだ」

以上がアルシデスの芸術の絶頂期のようすだ。もちろん、テレパシーで伝わる功績・偉業と目の錯覚を根拠に、偉大な巨匠だと判断できるわけではないだろう。しかし、この作品にどこか足りない点があること自体が偉大さをあかしだっていた。結局、率直に言って、わたしが来る日も来る日もアルシデスをエバと取り違えたことはそこまで深刻な事態だったのだろうか？

コピーはモデルを現実から追いやり、作品はひとりの女であると同時にひとつのアイデアになったということだ。わたしは生身のエバを忘れたが、エバという女のアイデアは、わたしを魅了したところを浮きだたせるどころか、恐怖と言ってもよい嫌悪へと沈めた。アルシデスとわたしは、エバとの関係でいうと対極に位置していた。好ましくない立

ち位置だ。

二十年のあいだ、わたしは、エバの人生という唾棄すべき長編通俗小説のエピソードをすすんで蒐集した。友人に頼まれたからというより、自分の意志で集めたのだ。わたしがエバを嫌うのは、神だけがご存じのように、アルシデスがわたしの妹と結婚した姿を見たかったからではないかと思う。工房で古い肖像画の修復・複製・剽窃に携わる姿が見たかったのだ。ヨーロッパに身をひそめ、おのれの肉体をもちいてつくりものの亡霊の人口装具の生産に従事するよりも。

矛盾し疎外された人生。身を売っていた、とアルシデスの敵対者や遺恨を抱えるならず者はほのめかすが、それは事実ではない。しかしエバ自身もそういう者たちに負けないほど中傷を好み、噂が広まらないよう自制しようとはしなかった。こんにちでも、あの美男のアルシデスはアレクサンドリアのカフェでダンサーとして働き、阿片窟で他人にたかるほど身を持ち崩したのだと信じているひともある。

こうした作り話のあれこれについて論じるのは控え、一般に知られていること、そして状況から推測できることに集中したい。アルシデスは外国で成功しなかった。失敗のせいで酒とクスリに追い込まれた。順番が逆だったかもしれない。どちらにしても違いはない。

最後にチリに滞在したさい、ロンドンのピンク・アンド・グリーン・バレエの振付師リユドミラ・コプフと結婚したばかりだったのだが、アルシデスはひどく老けて見え、化粧はうまくいっていなかった。エバとしてだけでなく、アルシデス自身にもなじまなかったと言ってもいいだろう。わたしの家で酔っぱらったときには妻と数人のアンドロジナスを連れていて、エバの肖像を初めて人前に出すことにひどくこだわった。結果は壊滅的だった。観客に妥協したが、ひとかけらも理

解してはもらえなかった。熟年を迎えた色男アルシデスはエバの昔の服を身にまとった。五十年代のチリ社交界で成り上がりとする女の戯画化以外のなものでもなかった。

それは、作品の価値をおおいに貶める行為だった。しまいにアルシデスは泣いて鼻水をたらした。これが、わたしがアルシデスを見た最後になった。そのほぼ翌日——かれはヨーロッパへの機上のひとだった——作品の残骸を受け取った。すでにわたしが指摘したように、継続を強制する、遺言にも等しい幕切れだった。そして八年後の——昨日のことだ——訃報。

遺灰壺。今度はわたしが、この物語を直説法現在で閉じることで、演じるふりをする番だ。ペンを執る代わりにエバの化粧台で彼女ともにもがくかのように——友よ、きみの遺志を遂行するのだ。このエピソードがすでに完結したものとして考え、過去形で語るほうがいいだろう。

わたしが不可能な状況に追いやられてもアルシデスは平気だった。かれは現実を一顧だにせず、ただエバを思い描いていた。わたしとエバが、ゴシック様式の廃城の地下実験室のような場所であたりきりになれると思っていた。そしてクリニクの施術用ベッドに身じろぎもせず横たわったエバが、おのれの意志にせよ意に反してにせよ、わたしが作業するのを待つと信じていた。

アルシデスもわたしも、教養ある人々であふれる豪邸の扉を叩くことになるとは思ってもいなかった。エバの最新の男友たち、夫ふたり、度重なる結婚で産んだ子のうち年長の数人——若く前途洋々たる専門家たち。幸せな家庭だ、要するに。

家の女主人として多忙であるにもかかわらず、死に瀕しているエバ

はわたしを寢室に通すように言い、わたしが差し出した手を、巢のなかに引き込むように両手で包む。

エバのベッドを囲む男たちはみなかいがいしい。ひとりが傘をあずかるようなしぐさで、わたしから壺を受け取るうとする。あやしい物体を手放すことを拒まれて、男たちは一様に警戒するように見える。

エバの耳元でなにかを言おうとしたわたしの口から、アルシデスの名前がするりと漏れる。男のひとりが固い表情のまま、聞こえませんがと言う。エバは、いかにもやさしげにわたしの妹コンスエロについて尋ねる。わたしは壺のふたを外し、エバの頭上に掲げることに成功する——見知らぬ神への乾杯。エバはまるでわたしを当惑で補助するかのようにベッドに座る。男たちはわたしの肩、両腕、腰を掴み、この部屋から放逐する。わたしは灰の筋を床に残す。おまえが大地に残した足跡のたったひとつのしるしだよ、アルシデス。

註

- (i) 詩・演劇・小説そして文芸批評で活躍したチリの詩人エンリケ・リン Enrique Lihn (1929-88) の短編小説『Para Eva』を和訳し紹介する。本作はリンの死の翌年刊行の短編集『La República Independiente de Miranda』(Sudamericana, 1989) 初出 (p.55-65)。底本には同書を用いた。
- (ii) フランスの詩人ステファヌ・マラルメ Stéphane Mallarmé (1842-1898)
- (iii) マラルメ『イジチュール あるいはエルベノーンの狂気』より。訳文は渡辺守章訳 (2010) 『マラルメ全集Ⅰ 詩・イジチュール』筑摩書房、p.209より引用。